

地形並城制

地形は戦の助けとなるものであり、詳らかにしなければならぬ。明確に陰易、順逆、遠近等を知るのが良将の能力である。ここで地形が戦の助けであると云うのは、我が小勢であっても、よく険阻な地形によって戦えば、大敵も攻めたり襲ったりできないということである。又、我が高所にいて敵を低所に受ければ、高所から低所へは身動きし易く得である。又、太刀や鎗等も高所から低所へは振るゝ易くて、敵の胸以上に当たるので、自然と利点が多い。この他、左下がりには武器を構えたり用いたりする姿勢からも都合がよいので、順とするのである。我はこれらに拠らねばならぬ。

○向い上がりとは左上がりとは逆である。我はこれに拠ってはならぬ。

○八達の地と云うものがある。はるか遠くまで開けて、四方に道路がよく通じている地のことである。このような場所に陣を取るのであれば、その中でも小高い所を見つけて陣を取れ。もしも高い所が二ヶ所あり、一つは後ろに山や水や藪等があり、一つはこうした物が無ければ、我は山、水、藪がある方の丘を取れ。

○険とは山坂、羊腸（細長く曲がりくねった地）、高嶺、大水、深泥等を云うのである。味方が敵より早くこれらの地に拠るようにせよ。

○敵が出て不利であり、我が出て不利な所は、進退両難の地である。敵から我を誘き出しても、出てはならない。このような時、我は陣を撤収して引き去れ。敵勢が追って来れば、敵勢がその地を出たところを反撃するか、伏兵を設けて討ち取れ。

右が地形の大略である。さらに細かく研究せよ。

城制 附居館

○天之時は地之利に如かずと云って、時日、十二支・十干、旺相（旺地・相地・休地・囚地・死地）、風雨等、天の時ににおいては勝つべきことわり理のある時を考えて、軍を仕掛いくさけても、地の堅固さには勝つことができないのである。そうであれば、城を築くには地形を選ぶことが第一である。地形が勝れて良好であるのは、天が造った普請ふしん（土木工事）であるから、別段に人が作る普請を加えなくても堅固なものである。これが地の險を人数の代りに用いることであり、地形を選ぶことの大意である。地形のことは、しっかりと会得しなければならぬ。

○『易』に「地險は山川丘陵なり。王公險を設け以て其国を守る」とある。そのように地形は国家の宝であることを知れ。これゆえに魏の武侯も「美なるや山河の固め、これ魏國の宝なり」と云ったのである。

○城を築くには、山か水に因るようにせよ。山水二つながらに備われれば最良である。

○城郭とは、内曲輪くるわを城と云い、外曲輪を郭と云う。孟子に「三里之城、七里之郭」と云うのも、内曲輪と外曲輪のことである。城はそれにより君主を守る所、郭はそれにより民を守る所である。民とは諸家中及び百姓町人までを総じて云う言葉である。

○城制は日本と異国でその構造が異なる。その構造が異なるので、籠城の仕方も異なるのだ。先ず異国の構造は前述したように、郭を頑丈に構えてこれにより民を守り、郭外に人家は無い。そうであるから籠城に及んでも、城下の地下人（官位を持たない名主、庶民）、商売人等が流浪して逃げ隠れることなく、上と共に郭を守った。日本流は外曲輪と云うものが無い。たとい郭があったとしても、民を守ることを重視してないので、城下の町屋をおびただしく広大にして、郭外に人家が多くあり、籠城と

なれば城下の地下人、商売人の類などは棄て置かれることから、難を逃れようとする者がおびただしく出て来て逃げ迷う。その上、天を怨み、君主を怨んで嘆き泣く声が街に満ちる。これらは外曲輪が無いからであると知れ。さて又、異国は大半が民兵でちまたあるから、城下には六府（宮中や行幸啓の警護の任などに当たる左右の近衛府・衛門府・兵衛府の総称）の武士が交代で詰めているので、官人以外には常住の侍屋敷は多くない。常住の侍が多くないので、おのずから商売も多くない。このゆえに城下も自然と無駄なく取りまとめ、郭外に人家が無いようにしているのである。日本は郭の構えそのものが粗い上に、武士を残さず城下に居住させているので、商売も次第におびただしくなつて、町屋を造り広げるので、城下は段々と広くなり、城は城、城下は城下と別物になった。こうしたことから籠城になれば、逃亡人がおびただしく出て来て、目も当てられぬ騒動を生じてきたことは、諸軍記に記されているとおりである。二百年以前、あらゆる物事が不足していた時代でさえ騒動を生じていた。ましてや今の城下であれば、どうなることであろうか。できることならば、繰り返し説いてきたように、衣食住と音信、贈答類の無益な奢侈おごりを禁じて質朴を教え、そこから捻出できる経費により、数年間かけて徐々に、日本の咽喉のどへいびにあたる所の城だけでも全て外曲輪を建設したいものである。総じてこの条は、有事にどうすべきかを工夫するところである。よくよく考察した上で整備すべきである。

○国主の居城は国の根本であり、人民が仰いで畏服する所であるから、地形はもちろん、普請も城門、及び外から見望する所は、大きく立派に造営して、壯観を誇示せよ。これが武徳を輝かして大平をもたらす術である。

○支城並びに居館等は、さほど壯観を示す必要は無い。険に拠って攻撃や襲撃を防ぐ

ことだけを主とせよ。

○大昔から四神相応の地を居城の勝地（＝勝利をもたらす地）としている。四神とは青龍、朱雀、白虎、玄武である。青龍は水である。朱雀は田や野が開けた広い平地を云う。白虎は大道である。玄武は山である。「前朱雀、左青龍、右白虎、後玄武」と云うのは、天神地祇の輔たすけがある地という意味である。思うに山を後ろ、広い平地を前、（河川や湖沼などの）大水を左、運送のための大道を右にしていれば、最高の地理ではないか。よって天神地祇の輔たすけが無くてもなお、有るようなものだ。

○平城は四方から敵を受けて好ましくない。その普請も縄張（設計）を巧妙にしなれば損害が多い。それでも天下を率いる大城は、広い平地にあって方々から寄り集って賑わい、四方の参勤や運送等の道路も等しく伸びている場所を重視するのである。諸侯以下は山か水かに拠って、片面に築くのが便利である。

○山城もことのほか高い山に築いてはならない。人馬の駆け引きが不自由になるものである。

○城の縄張に様々な習わしや伝授等があると云えども、基本的には「この城は高いか、この池は深いか」と云う言葉を旨として、全ての城制があらねばならない。

○城制は本丸、二の丸、三の丸、外曲輪（外堀）などと、ただ入子鉢のように構えるだけではなく、とにかく地形に従って三角にも、入子にも、長くも、最適なように築けばよい。広い平地に城を取るには、先ず少しでも高い所を本丸として、二の丸、三の丸、外曲輪（外堀）等を構えるのである。

○全て居城は、国の大小に従って遠近に拘わらず、険を設けよ。険を設けるとは、あるいは関を置き、あるいは切通し、あるいは登坂、あるいは船渡し等を造って、事が

あれば、この難所において一度は敵を止めて、居城を支えられるようにしておくことである。また、それらに応じて屏へいを設けよ。屏とは、重要な場所に身分が高く、武功のある者を土着させ、事ある時は本城に押し来る敵をくい止めさせ、又は後詰め等をもさせることである。広く云うならば、諸侯の国々は江戸の屏である。箱根、碓井、房州、浦賀等は江戸の險である。又、我が藩について云うならば、笹谷ささや、柵並さくなみ（作並）、尿前しとまえ、相去等あいさりは險である。角田、白石、岩手、水澤みやこ、宮戸等は屏である。天下の險屏と一国の險屏とで大小異なると云えども、その本質は差異がないものと理解せよ。

○入江や湖、海中等に突出している城は、水際に塀を築くものがあり、また水際から十間（約十八・二m）、二十間（約三六・四m）引き退いて塀、土居等を設けるものがある。これらは各城主の方略によるものである。

○全て城には烽火台のろしを設置せよ。危急の時に人数を集めるためである。烽火台を造るには、山城であれば山の高所に設け、平城であれば櫓台のように普請せよ。低いもので三丈（約九・一m）、高いもので四〜五丈（約十二・一〜約十五・二m）である。台上に約三間（約五・五m）四方、高さ二丈（約六・一m）程に上の方を細かく塗り込んだ室を造り、内側から壁を厚く付けよ。上部は屋根無しの空穴としておけ。その中に藁、あるいは杉の葉を込めて上を蓋っておく。危急の時は火をつけ、煙を上げて人数を集めるのである。ただし、平素にも年に一度は不意に煙を上げて人数を集め、烽火の様子を国人に理解させておけ。また、この平素における訓練の烽火では、駆け付けた二十番目までを称して褒美を与えよ。そうは云えども、紂王ちゆうおうの所業に倣ってはならない。（注：「殷の紂王」は誤り、正しくは「周の幽王」である）又、軍記を見ると、急な合戦の時などは、近辺の在家に火をつけて、遠方の味方に合戦がある事を知

らせたことも数多あった。このような時には、数箇所も火をつけるのである。

○城を取るのに十の習わしがある。一に地形、二に塀、三に堀、四に土居、五に門、六に馬出、七に石垣、八に横矢の縄張、九に柵虎落もかり、十に水溜である。又、それぞれ一条毎に格言があるので、左にその大略を記す。

○地形についてはすでに述べているので、ここには載せない。

○堀には二種類ある。水堀と乾堀である。水堀は水面において十間(約十八・二m)から二〜三十間(約三六・四〜約五四・五m)までに掘れ。深さは三〜四丈(約九・一〜十二・一m)に掘れ。岸の勾配は一丈(約三m)に四尺(約一・二m)の比で見積れ。ただし土の性質が良ければ、これより急に掘ってよい。

○乾堀は片薬研やげん※に掘る。もちろん城の方を深く掘るのである。

※薬研やげん||薬劑などを挽いて粉末化したり、磨り潰して汁を作ったりするための器具

○全て堀は泥が深いほうがよい。水が深くかつ泥が深いのが最も良い。

○水だたきと云って、水際だけを石垣にすることがある。

○塀は土台引きは悪しく、掘込み柱にしなければならぬ。石の根接ぎ柱が最も良く、もしも土台引きにせざるを得ない場合にも石土台にせよ。矢狭間は長く切り、筒狭間は丸く切るのである。また、立狭間、居狭間の高低がある。立狭間は立った人の乳の大きさに切り、居狭間は居敷した人の肩の大きさに切るのである。何れも内側にあがきを付ける。あがきとは、内側を広く塗ることである。又、板狭間があり、これは厚板に狭間を切って、壁中に塗り込めるのである。

○控ひかえはしら柱の打ち方に二つある。筋違いに打つものがあり、又塀から四尺(約一・二m)程内側に退いて、別に柱を立て、上下二ヶ所に塀柱から貫を通して固定するものがある。

る。こちらがより良い。籠城の時は、上の貫に板を渡して、塹の外に矢や鉄砲を放ち、投石等をする足場に用いるのである。

○塹の下には一面に石を敷け。又急いで塹を立てるときは、壁の下地の立竹を土中に七〇八寸（約二一・二〇）約二四・二cm）ずつ差し込め。

○築地と云うのは、良質の土を一片四〇五寸（約十二・一〇）十四・二cm）、長さ一尺（三〇・三cm）程に打ち固め、これを段々に積上げ、隙間々々には煉土を込めながら、高さ八〇九尺（約二・四〇）約二・七m）の壁に造るものである。

○石が多い国では、大石を重ね上げながら、その隙間を煉土により打ち固めて塹にしている。これも又、堅固なものであるが、掘り崩し易いという弱点がある。それでも大石だけを重ねるのは堅固である。



○異国では磚かわらと云う物を製造して、城の塹、石垣等に用いている。その造り方は、良質の土を煉って磁器せじもののように火に焼いて堅くするのである。甚だ堅固なものである。

『武備志』にもその製法を見ることが出来る。又『台湾府志』を見ると、安平城の条文中に「大磚おほいし、桐油灰、共に搗ついて城を成す。高さ三丈五尺（約一〇・六m）、広さ二百二十七丈（約六八七・八m）」とある。又、支那山西省の人が語ったことを聞いたのであるが、秦始皇帝が築いたところの万里長城は、西は流沙に起こり、東は遼東に至って、その長さは九千里、即ち日本道で九百里（約三五三四km）である 高さ十丈（三〇・三m）、広さ二

十丈（六〇・六m）であり、土手のような石垣にして、その一つの磚かわらの大きさは、あるいは二〇三丈（約六・一〇）九・一m）、又は四〇五丈（約十二・一〇）十五・二m）にも及ぶと云う。妄りに聞けば、山西人のほら話のようであるが、深く大磚の製造を考えれば、良質の土を長城用の寸法に煉って造形し、直に火をかけて焼いた物に違い

ない。これこそが蒙沾もうてん（前二五〇〜前二一〇年、秦朝の名將、齐国出身）による造工の妙から出たものである。

○石垣に三種類ある。野面のづら、打缺うちかき、切合きりあわせである。野面とは自然なままの石で築き上げるものである。打缺とは石の角々を打ち欠いて築くものを云う。切合とは空間すきまが無いように切り合せたものを云う。野面、打缺は粗いものであり、切合は精密なものである。それぞれその場所に従って、精粗の石垣を用いよ。最も重要な箇所は切合にして、その上に石を繋ぐことがあると云えども、皆工人の伝となつて、武士でそのことを知っている者はいない。石垣は築城で第一の工事であるから、志ある将士は伝授されるべきことである。加藤清正は石垣の名人と世に言い伝えられていたことを思え。

○又、石垣の勾配に三種類ある。下縄さげなわ、緩たろみ、棹出はねだしである。下縄は垂直であり、このような断面である。緩はこのような断面であり、垂直ではない。棹出はこのように石垣の上際に椽たるきのように石をはね出したものを云うのである。この石垣は登り難いものであると云う。朝鮮国の城にこの石垣が多いと聞いている。

○土居は堀の土を上げて築け。かつ土居の高さは、根張の半分であると知っておけ。たとえば根張十間（約十八・二m）であれば、高さは五間（約九・一m）と理解せよ。

○土居へは香附ばくもんどう、麦門冬ばくもんどう、荒芝、小笹の類を植えるのがよい。これは土止のためである。根方には枳殻からたちを植えるのも良い。

○土居に鉢巻と云って、上の方にだけ石垣を築くことがある。土居の大小にもよるが、大体六〜七尺（約一・八〜約二・一m）内外に築くようにせよ。

○門に楼門があり、単門がある。楼門とは櫓門である。全て城門は升形を付けて二重門に造るのが好ましい。

○総て城門には少しでも坂を付けよ。全くの平坦地であれば、仕寄道具しよせ（城攻めに用いる器材、竹を大きな束にしたものや土を詰めた俵等）を取り付け易いものである。

○二重門は、内側が楼門、外側が単門となるようにせよ。

○楼門の二階を扉より六〜七尺（約一・八〜約二・一m）も突出させて造り、かつ敷板に格子を設けておいて、扉近くの敵に石を落とす、炒った砂をかけ、沸湯にえゆ、糞尿等を撒き散らせ。又、焼くための草を摘んで火をかける様子があるときには、素早く水をそそぎ掛けよ。
楼門の階上に、水と石をおびただしく用意しておけ。もちろん竈も多く造っておくこと。

○門の地伏じふく（＝門の最下部に、地面に接して取り付ける横木）の下には、大石を敷いておけ。

○馬出に丸馬出、角馬出、塚馬出あづて、馬出無しの小口、升形向小口等種々の口伝くでんがあるけれども、さほど秘訣の沙汰とするまでもない。馬出の目的は、ただ人数の出撃するところを早く敵に見られないためである。早くに見られてしまえば、射すくめられて城から出るのが難しくなるので、物陰からひよつと飛び出せるようにする。これが馬出であるから、あまり念入りに普請ふしんすることでもない。

○馬出は塀にするのもあり、又土居しどみにも、当時の状況に応じて造ればよい。

○横矢の縄張と云うものがある。全て城の縄張は直線に長く取ってはならない。二十間（約三六・四m）、三十間（約五四・五m）で折り曲げて相互に横矢が届くように構えるのである。又、地形により百間（約一八二m）も百五十間（約二七三m）も直線に長く構えることがあれば、二〜三十間の間隔で幾所も張出を構えておき、横矢を射ることができるようによせよ。これらが全て縄張の趣意である。これについてあれこれと難しいことを談じる者も多いが、さほど奇妙なことでもない。ただ横矢の効果が絶大であることを奇妙とするのである。

○『ゲレイキスブック』には、オランダを始めとするヨーロッパ諸国の城郭の図が多い。その縄張も横矢を第一にして構えている。その図の大略を左に写す。よく考えながら見よ。

阿蘭陀流域池之圖左之如し。



右に図示するところの縄張は、大小城は云うまでもなく、僅かな^{とりで}壘であつても、これを心掛けて取れば得るものが多い。又、極めて巨大な城と云えども、例外なくこの縄張を用いよ。エジプト国のハヒランと云う城下は、世界最大の都城であり、その広さは四方が三日路もあり、その総川の周囲は十日路であると云われている。それでもその普請は横矢の構え、あるいは石火矢台、高樓等が連綿として隙間なく設けられている。その普請は全部で百九十年をかけて成就したと云う。

○城制は右のように、総川を広大に設けて、総川の外には民屋が一つもない無いようにするのが極上である。私見を申せば、日本の都城も総川を広大に設けて、さてその

守り場については、郭中の四民及び坊主、山伏等に守らせるのである。その方法は、これより東に幾百幾十間は何々町の守り場、これより西に幾百幾十間は何々町の守り場とあらかじめ定めておくのである。その守具は弩弓、石弾はじき、クルリの三つを用いる。弩弓は非力の者及び婦女、幼弱の者等に強い弓を射させることができるものである。その取扱い方は、蹶張けっはりと云って両足を弓に踏み掛けて、両手で弦を引けば、強い弓も婦女子の類でさえ射られるのである。石弾は仕掛物であるから、弩よりも容易である。クルリは又一段と扱い易いものだ。稽古はその町々で稽古日を定めておいて、毎月一度ずつ教える。さてこれら三つの兵器の用意はその町々の役割であり、常日頃から継続的に調べておき、その町々の名主や検断（警察・治安維持・刑事裁判に関わる職務等）の所に預けておく。これが総川を守る方法である。本城は武士が守る場所である。百年を期せば、こうした普請も成就するであろう。

○柵とは木を一面に並べて埋立て、貫ぬきを通しておくものである。虎落もかりは竹を筋違いに組合せて埋立て、幾重にも縄により結び固めておくものである。蔀しじみとは葉の付いた木枝によって垣を造るものである。柵、虎落の二つは、地形が堅固で堀や塀の必要がない場所、又は山の尾崎、あるいは陣営、又は普請場（工事現場）などに用いる。蔀はどの方向からも見透けてはまずい場所に用いるものである。

○水溜めは山城等において水が不自由であれば、湧清水等を溜めておくため、あるいは池を構え又は水槽を設けて貯えよ。又清水も出てこない所であれば、水槽を数多こしらえておき、雨が降る時に簷庇のきひさしあるいは地面を流れる雨水を、一滴も漏らさずに受けて溜めよ。楠木正成が赤坂で設けたようにやるのである。

○汚水又は糞尿までことごとく溜めておいて、城に取り付く敵兵に沸かして打ち掛

けよ。日本の城制は不浄を流すと云って、汚水を全て流し捨てるが、これはよろしくない。溜池を設けて溜めておき、その余るところを流すようにせよ。

右が城制の心得であるとは云えども、この条々だけでことが済むと云うのではない。異国や日本の城制は、諸書に詳しくある。それらをよく読み合わせて工夫せよ。ここに言うところは至極の大略であり、その一端を見せようとしたに過ぎないのである。

○陣屋、かきあげ 居館は皆城の類であり、堀をも掘り、杭違をも設け、馬出等をも付けたとしても、力不足して普請が粗いものであれば、城とは云い難い。さて陣屋、千石である 居館の三つは身分の高い土着の武士が居る場所である。土着の武士百貫(三七五kg)

以上の者は、家中も多く、百姓も数多であるから、居館の構え、縄張等に心配りをして普請をしておき、事変になれば家中百姓等の妻子や家財まで収容して乱妨の被害から避けさせ、又は武力を發揮して敵の通過をもくい止めねばならない。大いに国の屏となることである。近来一国一城と云うことになって、国持大名も僅か一〜二城に過ぎない。昔は和漢ともに大国の諸侯は、城を二十も五十も構えていたことが諸史に載っている。このゆえに事変に際しては相互に援助し合うことで、持ちこたえ難い小さな国々でも久しく生存できたという事例が数多あるので、読んでおくこと。元来は溝を掘り、柵を作っただけでも、城と云うものである。ただ国の大小、緑の多少によって、普請の精粗や、大溝と小溝の差異が生じるまでのことである。さて遠国のことは知らないが、仙台藩の封中では大昔から天正(西暦一五七三〜一五九二年)の頃までの城や館と云われる所の跡が五百三十余ヶ所もある。今その城跡を見ると、ただ地形に頼って少しばかり溝や堀等を構え、又は柵を作り、あるいは植木等をして門に少しば

かり杭違等を設けただけのように思われる。これらは皆、古代土着の武士たち面々が住む所に心を傾けて普請をしておき、事ある時には家中も百姓も一致団結して武力を發揮したという事に他ならない。今もこの心持で国法を整備すれば、武を逞しくたくますることは「掌たなごころに運めぐらす（＝自由にあやつる、思いのままにする）」かのようになるだろう。この「武を逞しくする」ということは、聖人の道であつて、和漢の差異があるわけでもない。つまり武を逞しくすることは、人を多くするにある。人を多くすることは、武士を土着させるにある。武士が土着して人が多くなれば、かきあげ聖も居館も保ち易くなり、少なからず国家の防衛にもなる。この心持を孔子も「食足りて、兵足る」と言い、又「庶、富、教（人民が繁殖し、国が富んでも、教えというものがなければならぬ）」とも説いている。将たる人はよく思いをいたせ。

附 全ての城中には篋竹へらだけを多く植えておくこと。矢の材料に用いるためである。もつとも弓工、銃工、矢工、鍛冶等を足軽が兼務できるように習わせて、用を足すことは、これまで繰り返してきたとおりである。よく心配りせよ。